和田合戦のきっかけ
「鎌倉星月夜　朝比奈・松島恋物語」

講談師　一龍斎貞花

平安期から鎌倉時代にかけて和歌が盛んだったようで、ラブレターのやりとりも和歌でやりとりするほど。

和歌の名手鎌倉三代の将軍源実朝、月に一度お歌の会を。将軍はじめ歌の道に優れた人が審査員となり、秀逸一位、二位を選びます。ある月の会に第一位に選ばれましたのが奥女中取締役局松島。年の頃19か20歳、あでやかで美しく上品な女性。

この松島を見初めたのが、執権北条義時の次男名越次郎朝時。後に北国七州の主になる人ですがこの道ばかりは別。夜明しで恋文をしたため、松島の老女賤機に手紙と共にいくらかの金を握らせました。

ところが返事がない。さればと又一通書いて賤機に。又返事が来ない。

三度目の正直ともう一通。主人松島からの給金より、手紙の運び賃の方が多いのですから賤機も責任重大。

「只今朝時様から三度の文をお預かり致しました。何卒お目通し下さいましてご返事の程を願いまする」

すると松島、手文庫の中より前の二通を取り出し、今の一通と三通の文をそれへ並べ、

「お身はわらわより年優ったる者。万一わらわがかかるみだらなことを致しなば諌める身。それを取持ち致すとは何事ぞ。奥女中取締役の松島、そのもと乱れれば末は納まらず、以後は固く慎むべし。朝時様へお戻しなされ」

三通の手紙戻された朝時、

「一通も開封せずに戻すとは、おのれ憎っくき松島め。我は執権の次男。奥女中に恥しめられ、やはかこのままに捨ておくべきや。強いてなりとも我が心に従わせてくれん」

哀れ恋の迷いの奴となり果てし朝時、時の至るを待ちうけております。

翌月のお歌の会、松島の様子をジッと気を配っております。

と松島、何事か用が出来たものか、御前を退き部屋を出た。

この折こそと朝時御前を下がり、奥と表の境の廊下衝立の影に身をひそめ、松島来たれと待ち受けます。

かかる曲者が待つとは知らぬ松島。掻取りのさばきも鮮やかに雪洞を手にツウーツウーと、衝立の前まで参りました時、いきなり横合いから朝時が雪洞を叩き落したから灯りは消えて真の闇。アッと驚き逃げんとする松島を後からむんずと組みついた。

普通なら悲鳴を上げる処でしょうが、流石奥女中取締役。抱き止められし手をさわってみると年若い男の手。

「もし何人におわそうや。奥女中取締役局にて候うぞ。みだらな振舞い遊ばすが、人違いにては候らわずや」

「人違いにては候らわず。執権北条義時の次男名越の次郎朝時なり。お身の姿一目見しより煩悩の犬追えども去らず、哀れ恋の迷いの奴となり想いの丈を筆に言わせて送るといえども返書なし。そのつれなきを恨み強いてなりとも我が心に従わせてみせん。早速この場に情授け給え」

「アッ」と驚き逃げんとする松島をその場に押し倒し、あわや無態の振舞いに及ばんとした。

ここに至って流石の松島も「アレーッ」

と叫んだ。

この時あたりに人無きと思いきや、その夜の宿直を致しておりましたのが、所司の別当職、和田左衛門尉義盛の三男朝比奈三郎義秀。

事実は、木曽義仲と巴御前の間に出来た子ども。戦功立てし義盛が、かかる女丈夫なら定めし強い子を授かろうと巴御前を申し受けた。もうこの時には朝比奈が宿っていた。生れて義盛の三男になったという訳。

当時鎌倉随一の豪傑と謳われし義秀の耳にか弱き女性の悲鳴が聞こえた。

豪傑朝比奈三郎義秀、

「ハテ、今宵は奥表入れ乱れてのお歌の会。さては若侍奥女中に対しみだらな振舞いを致すのではあるまいか」

声を頼りに長廊下に立出でてみれば、その場になにやら人の気配。闇をすかしてみれば、若侍が女を倒して想いを遂げんと致しておる。

ツウ、ツウーと駆け寄った義秀。二人を手元に引き寄せ小脇に抱え、物をも言わず己の詰所に連れてくるや、灯りをフッと消して闇となし、

「アイヤ誰方かは存ぜねど、上様のお側近くに於いてこの狼藉何事ぞ。本日宿直の役はかく申す朝比奈三郎義秀なり。只今より御身らを問注所へ引立てなば不義の大罪まぬがれまい。さりながらかかる小事を手柄と致す義秀ならず。今宵は武士の情をもって見逃し申すによって以後は固く慎まれよ。暗きより暗き処へお連れ申したなれば何人なるや面体わからず。以来何処に於いて出逢うとも恥しき事の候らわず、人目に掛からぬ内、即退散されよ」

実に立派な意見。

虎口を逃れし心地にて、一足先に己の居間に立ち戻った松島。

「なんと情けの深いお方であろう。もしあの時問注所へ引っ立てられなば、不義の汚名はまぬがれず。それを暗き所へ連れてご意見のあの一言。流石は所司の別当職和田義盛様の御三男。執権職のご次男朝時様とは雪と炭。ご武勇といいお人柄といい、女と生れた冥加にはこういう人と添い遂げしなば、いかばかり幸せであろうか」

感謝の気持ちが恋にと変わって参ります。想い内にあらば色図に現るのたとえ。日々につのって参ります朝比奈への思慕の情やみがたく、明け暮れ松島物思いに沈んでおります。

一方召使いの賤機、例の一件でお小言を頂いてからというもの、なんとか名誉挽回しなければと、なにかにつけて松島のご機嫌を伺っております。

「旦那様には近頃いかが遊ばされましたることか、なにかお気の晴れませんことがありましたならば、なんなりとこの賤機までお話し下されませ」

松島、恥しさをうち忘れ、

「賤機、このこと決して他言致すでないぞ。実はこれこれしかじか、面目無けれど、わらわは朝比奈様をお慕い申してな」

この間、自分に意見をした人が、うって変わって自分が恋煩いになっちゃった。

「アー、左様でございましたか。それならば貴女様のお気の晴れますよう玉梓をお書き遊ばせ、手前が朝比奈様へお届け致しましょう」

「左様か、それではしかと頼みますぞえ」

変われば変わるもので、今度は松島が手紙を書いて賤機へ。

ここぞ恩義の見せどころと、賤機人無きを見てそっと朝比奈へ。

「ハテ、意外の人よりの手紙。なんであろう」

不審に思い、屋敷に戻り開いてみると、流石は鎌倉随一の美女と謳われし松島の手紙、水茎のあと、いとど麗しく、

「先般お廊下において狼藉を受け、すんでに身を汚されんと致したる処を、貴方様のお情けにより危きをお救い下され誠に有難く・・・」と。

「さてはあの時の女性は松島であったか。灯りを消して顔を見なかった」

ここに初めて判った訳で、後を読んで参りましても恋文らしきことは書いてございませんが、最後に一首歌が。

〝張りつめし胸の氷の苦しさを
朝日に解くる折を松島〟

やがてこれが縁となりまして二人は恋仲に。ところが朝時これを恨みます。これがきっかけの一つになり、遂には執権北条義時が、有力御家人和田義盛を滅す絶好の機会と義盛を挑発。かくして和田合戦に進展しようというお話は、次回連続に申し上げます。